

一学期の抱負とその展開



青 木 道 代

(一) はじめに

一学期は、新入園児にとってはすべてが珍しく、また、不安で、園生活に馴れるのが精一杯というところであろうし、在園児にとつては進級によって、今までは少し違ったふんい気に囲まれ、一級上のクラスになったのだという自負と喜びが、責任感を伴って訪れる季節であろう。

したがって、この期間は子どもたちが先ず、自分のおかれた環境を見極め、それを積極的に自分のものとして行くような配慮が必要であろう。また、新入園児の家庭に幼児教育の根本理念を知り、もし誤った児童観、教育観を持っているならば、それを訂正して貰うための働きかけを積極的になさねばならない。進級児の家庭にしても、過去の一年、もしくは二年間を振り返って、また、新たに子どもたちとともに前進して行くことと心がまえを持つよううながすべきであろう。

四月から七月、花あり、新緑あり、さみだれあり、灼熱の太陽あり、自然の変化が盛んで美しいこの春から夏への季節、子どもたちとともに十分に自然の恩恵に浴そう。

街でも人々は活気にあふれて働いている。幼くても人間社会を構成する一メンバーとして、人々の働きをよく知るために、事情の許す限り、園外保育に出かけよう。幼児教育施設は、幼児を社会から隔離するためではなく、いつも開かれた形で立て

られており幼児はそこから出て行つては、見たこと、学んだことを持ち帰って、集団の中で再学習する、そのためにあるのだと私は思っている。

以上のような願いを、具体的には次の三つの方法で展開して行きたいと思う。

1、幼児文庫活動

2、散歩・動物の飼育、夏期キャンプ

3、見学

(二) 展開

1、幼児文庫活動

家庭の、幼児教育に対する理解を深めるためには、多くの努力が払われる。日常の連絡ノート、園の通信、教師の研究発表、講演会、父母会、保育参観等々……。これらはもちろんどれ一つとして欠くことのできない大切な手段である。しかし、これらに共通していえる一つの問題点があるように私には思われる。

それはどれも幼児について語られ、幼児について答えられながら、幼児そのものがそこに参加していかないということである。教師対親の対話は、いずれも教師の見た幼児、親の見た幼児についてなのであって、いわば、教師の投げた球は、幼児というグラウンドに、バウンドすることなく、ストレイトに親に受けとめられ、同様にして、親から教師へと投げ返されているのだ。

私たちの園は、比較的園の通信を詳しく書く部類に属するのではないかと思うが、週二千字内外の通信（主として子どもたちの遊びのようすを保育者の目で捕えたものの報告）を書きながら、その反応が、ある熱心な一部の親たち以外には、響き返ってこないことに、もどかしさを感じたものだった。

それが、三年程前に、園の本棚を開放して幼児文庫活動を始めるようになってから、教師対親、親対教師の対話が、幼児という場に一度バウンドしてから、かわされるようになったと思えるのだ。具体的に説明すると次のようにいえるかと思う。

教師Tと幼児Hとの対話、本棚の前で、

H「せんせい、この本おもしろかったよ」

T「そう？ よかったわね、どなたが読んで下さったの？」

H「お父さんき、ごはんのあと、ぼくをだっこしてね」

T「まあ、Hちゃんのお父さん、すてきなお父さんね」

H「うん、あしたまた借りられるんだね、（貸し出し日は、火・木・土の三日）こんど、何借りようかな？」

——園の通信の一節「お父さんのひざにすっぽりとすわりこんで大好きな絵本を読んで貰う——こんなすばらしい世界がどこにあるでしょう。どんなおみやげよりも、忙しいお父さんに、ほんの五、六分心をこめて絵本を読んで貰うことの方が、子どもにとってずっと嬉しいのです。忙しさに紛れて離れ勝ちな父親と子どもとの心のふれあいを、楽しい絵本を通して深めて行って下さい

「」

M 「ママがね、同じ本ばかり借りてきちゃいけないって」

T 「あら、どうして？ Mちゃん、その本大好きなんですよ？」

M 「うん、でも、もっといろいろな本借りてきた方が、お勉強になるって」

T 「？」

X X X

K 「お母さんがね、いつも、うすい本ばかり借りてこないで、もっと厚い本を借りてきなさいって」

T 「Kちゃんは、どっちがいいの？」

K 「こっち、(薄い絵本を示す)」

T 「そう、じゃ、それ借りてお帰りなさい、お母さまにはお手紙書いてあげましょう」

——園の通信の一節「絵本はたのしむためにあるのです。昔の修身の教科書のように、『ためになるから読む』ではありません。

子どもを少しでも早く利口にしよう、本に強い子にしようとおせる心は、かえて子どもを本嫌いにします。文庫の本は私共が責任をもって選んだ本ですから安心して、どんな本でも、お子さんが借りてこられる本を、いっしょに楽しんで読んであげて下さい」

——母から教師へ、「むずかしいのではないかと思われる本ばかり借りてきて、読まずに返してしまいます。少し、やさしそうなものを選んでやって下さいませ」

——教師から母へ「○○ちゃんは、早く大きい組のようになりたくて、厚い本を借りたのでしよう。小さい組の人たちのために、もう少し配慮してあげるべきでした。これから気をつけましょう」

——父から教師へ「何度も何度もよまされるので閉口して、テープコーダーに吹き込んでやったら『キカイじゃだめよ、やっぱりお父さんの声でなくっちゃ』とやられてしまいました。子どもが本読みに求めているものが何か、少しわかったような気がします」

——母から教師へ「三歳のわが子が、こんなに本好きとは夢にも思いませんでした。通信ですすめて下さったおかげで、父親が毎晩せつせと本を読んでやってくれるので共働き家庭ながら、子どもがのびのびと豊かに育ってくれるようで嬉しく思います」

——母から教師へ「『おだんごばん』の本を読んでやると、歌のところにくると必ず『待って！ わたしが歌ってあげるから、これ、ようちえんでつくった歌よ』といって歌ってきかせてくれます」

——母から教師へ、「裏庭の物干柱に釘がたくさんうちつけてあるので、子どもにききましたら『ぼく、ちびくろ・きんぼなんだ、うーふとむーふを助けるんだよ』と答え、思わず笑ってしまいました。椰子の木のつもりだったのですね」

——父から教師へ「『がらがらどんのうた』を大声で歌いなが

ら、食卓の下にもぐりこむと』トロールだぞう、たべちやうぞう』と毎日楽しそうに遊びます」

——教師から父へ「Sちゃん、幼稚園ではトロールがこわいのです。がらがらどんの橋へみんなで馳けて行く時にも、いつも一番後からやってきます。家で、その埋めあわせをしているのです」

× × ×

このようにして、子どもたちが園から家庭へ持ち帰り、何度も読んで貰っては園に返す絵本が、教師と子ども、子どもと親たち、親たちと教師との固い心の絆となって、園、家庭、幼児、三者をより緊密に結びつけるようになった。

即ち、親たちは絵本を読んでもやることによって子どものこまかい心理の動きを追うことができるようになり、絵本をめぐってほぐれた会話のいとぐちが、次々と園での生活を子どもたちに語らせる結果になるなど、文庫を始める時には意図しなかった思わぬ副産物が生まれてきたのだった。

こうして子どもたちが家族ぐるみで絵本好きになる頃、園では更にその絵本の内容をとりあげて、劇遊びに展開したり、小さなオペレッタにしたりして楽しく遊ぶ。こうして従来受動的、静的活動として見られていた本よみも次第に能動的、自発的な遊びへと展開して行くのだ。

現在、毎週土曜日には二、三名の母親に、本屋さんを称して文庫の貸し出しをして貰っているが、いずれは、子どもたちを相手

の本読み活動に、加わって貰って、集団の中の子どもと絵本の関係について学んで欲しいと思っている。

2、散歩、動物の飼育、夏期キャンプ

「子どもは野外動物である」と誰かの言葉にあったが、大雨でない限り、日に一度は散歩（それが「見学」であることもある）に出かけることにしている。「おさんぽに行きましょう」と呼びかけた時の、子どもたちのいそいそしたようすは、それが如何に彼らの欲求を満たすものであるかを物語っている。

園の立地条件にもよるが、なるべく危険の少ない道を、のんびりと歩く、日々移りかわる自然は、黙っていても、子どもたちの興味をそそるものを差し出してくれる。

草むらでは、かまきり、ばった、てんとうむし、かたつむり、青虫。小川では、めだか、おたまじゃくし、どじょう、ふな。林では、かぶとむし、かみきり虫、せみ。畑には蝶、ひばりの巣。教師は図鑑や絵本の二、三冊はいつも忘れずに持参すること、

「これなあに？ 何て虫？」きかれた時にはいつでも、ともに調べる姿勢を保つことが、子どもたちの科学する心を育てることになる。つかまえた昆虫類は殺さずに逃がすか、飼育してみよう。

また園で飼っているウサギや、モルモットに新鮮な青草のお土産をいつも忘れない心づかいが欲しい。ウサギはきれいな好きで一定の場所しか大小便をしないこと。カナリヤは枝に一本脚でとまって首を羽の下にさし入れて眠ることなど、子どもたちと

もに世話をしてこそ、教師の知識も地についたものとなる。

飼育の当番になって、家から人參の葉や野草などを抱えて来る子どもたちの顔は得意気で、園生活に馴染みにくい子どもも、動物には心を開いて何くれとなく世話をする姿が見受けられる。

一学期の終りともなれば、年長組の態度も落着き、グループで遊ぶ姿がよく見られるようになる。この時期を捕えて、夏期キャンプの計画を立てさせることにする。海辺や林間でなくても、住みなれた幼稚園で、丸一日か二日、生活をともにするのである。家庭から離れ、すべてを自立生活するのである。

食事の仕度等も自分でできれば更によいが、母親たちに手伝って貰うにしても、陰の協力をして貰うようにし、子どもたちの自治で楽しく生活させる。相談する、準備する、生活する、この三つのことが、周到な教育的配慮の上に立って、子どもたち自身の手でなされる時、キャンプの前と後とは、大きな成長の飛躍が見られる。

ともに仰ぐ夜空の星、月、そして燃え上るキャンプファイヤーの火の粉、それをとりまいて踊る原始人の踊り……。そして友との静かな眠り、涼しい木陰での朝食、砂あそび、水あそび、どれひとつとっても、新鮮な心浮き立たすような経験である。労をいわずにぜひ経験させたい夏の生活である。

3、見学

幼児教育施設は孤立して在るのでなく、この流動する社会に向

かって開かれたものであるべきだとさきに述べた。このような観点に立って、私はつとめて、日々、生きて活動しているこの人間社会を、子どもたちとともに見学に出かけることにしている。子どもたちの興味を、自動車に集中していれば自動車修理工場を、「かわ」という本に熱中していれば、川の流れに沿うて、自然的な川から人工的な川への推移を辿ってみる。

お店屋、こつこつが盛んであれば、各種のお店を見に行く、見学に行く場合、相手方に迷惑をかけたり、失礼なことがないようあらかじめ十分な打ち合わせをすることは、ぜひ、必要である。

また、鉄道、電信電話、郵便等の記念日を覚えておいて、その日に訪ねるようにすると、向こうもそのつもりでいねいに案内して下さる。私の園は教会附属の園ですから、六月第二週の日を「花の日」として守り、各家庭から持ち寄った花々で花束をつくり、病院や各公共施設を慰問することになっている。これも見学のよい機会となる。

また、「犬も歩けば棒にあたる」のたとえ通り、道を歩いていると予期せぬ収穫物にぶつかることがよくある。たとえば、大きな地下の防火貯水槽がそれである。

「おじさん、こんにちには、おつかれさまです」「やあ、こんにちわ、おさんぽかい?」「おじさん、そんな大きな穴はあって、どうするの?」「これかい? これは、火事がおきた時消すための水を入れておく箱さ」「へえ、大きな箱だねえ。随分水が入るだ

ろうねえ」翌日、そこを通った時、穴はもう土でふさがれてただの道になっている。

けれど子どもたちは、その土を踏みならしているのだ。「じゅめんの下には箱がある。水のいっぱい入った箱がある」しばらく行くと、マンホールのふたをあげて、電話の回線修理をしている工夫さんに会う。また少し行くと漏水をなおしている水道工事の人に会う。

こうして子どもたちは、日頃何気なく歩いている道の下にも、私たちの生活に不可欠のいろいろなものが存在していることを、身体で知るので。自分たちが、毎日楽しく暮している陰には、たくさんの人たちの働きがあることを、子どもたちは体得する。絵本や辞典などで知っていたことと、じかにこの足で踏みしめて知ったこととは大変な相違である。

このような経験を数多く重ねて行くうちに子どもたちは社会的人間として成長して行くのだ。おとなのつき合いの仕方(挨拶、お礼の言葉など)も身につけることができる。安全な歩き方も身につけてきて、事故から身を守る手段も巧みになるだろう。危険だからといってバスで送迎し、園から一歩も道に出さないようなことでは、いつまで経っても一人歩きのできない子どもになりかねない。

見学から帰ってきたら必ず、短かくてよいから、今日見てきたことについて話し合いの時を持たせよう。互いに話し合い確かめ

合うことによって、各自の持つ印象が一層鮮明なものになってくはるはずである。絵に描き留めることも一方法だが、ことばによって表現することもそれに劣らず大切なことである。

× × ×

(三) おわりに

入園当時おどおどしていた新入園児たちが幼稚園生活を、家庭から離れた第二の社会として楽しく受け入れることができたか、一学期の終りに当たって、一人一人について点検してみよう。目立たない、内向的な子どもが、じっと唇を噛んで立っていたりすることのないよう、静かであっても、花のような笑みをたたえて、園での自分の位置に充足していられるような、優しい配慮の行き届いた保育でありたいと思う。

また、進級した年長児たちは、園から更に、外の社会、自然にと一歩を踏み出し、開かれた第三の社会(小学校、地域社会)の一員となるべく、互に協力し、学び合いながら、成長して行って欲しい。子ども同士、子どもと教師、子どもと家族、家族と教師との対話が、更に活発化して欲しいと思う。よく話し合いがなされ、納得の上で行動が起こされる時、そこに真の意味の民主的グループが形成されて行く。このようにして、活動的な夏を迎え、収穫の秋、第二学期へと、子どもたちの集団は更に前進を続けて行くのだ。

(小郡教会附属すみれ幼稚園)